



Newsletter

June 2012 No.16

■ 魅力ある日本神経内分泌学会に向けて

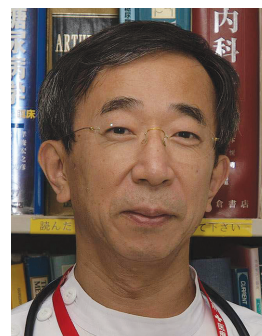
日本神経内分泌学会常務理事 岩崎泰正（高知大学臨床医学部門）

もう6～7年前になりますが、当時の日本神経内分泌学会・千原和夫理事長の命を受けて、本学会「若手在り方委員会」のまとめ役を仰せつかり、各委員の先生方の多大な援助を仰ぎながら、答申を提出させて頂きました（内容はNewsletterに掲載されております）。その後、学会役員諸氏の御尽力により、そのうちの幾つか、例えば「若手シンポジウム」、「研究助成金」などの企画が既に実施されていることは、皆様ご存知の通りです。一方で、本学会が、基礎と臨床のバランスの取れた、誰でも加入したくなる魅力ある学会に発展しているかといえば、未だ道半ばといったところでしょうか。

私の考える「神経内分泌学」とは、ホルモンという切り口から末梢臓器の中樞性制御を探る学問です。高等動物では生命現象の大部分に中枢が関与することを考慮すると、神経内分泌の研究領域には、生体機能のほぼ全てが包括されます。特に、最近話題の多いテーマ、たとえば1) エネルギー代謝と摂食調節（消化管ホルモン分泌調節を含む）、2) 時間医学（体内時計や視索上核機能）3) 水・電解質代謝（水利尿剤普及との関連）、の少なくとも3つは、本来、神経内分泌学者が主導して研究を進めてきた領域の筈です。しかし現状では、むしろ肥満・糖尿病領域や、循環器領域の研究者の活躍が目立ちます。また発表されている研究や講演の内容を神経内分泌学的な視点から見ると、「何を今更・・・」「あなたに言われたいは・・・」といった気分にもなります。しかし愚痴を言っても始まりません。

積極的に情報発信してこなかった我々の側にも、責任の一端はあるのでしょうか。

日本神経内分泌学会は、理学部、農学部、薬学部などに所属する生命科学者、解剖、生理、病理学などの基礎医学者、それに内科、外科、小児科、産婦人科を含む臨床医学者の誰もが参加でき、研究成果を発表できる稀有な学会です。言い換えれば、極めて学際的であり、かつ情報交換やクロストークの場として重要な機会でもあります。このメリットを生かし、どの分野の研究者からも「参加してよかった」と実感できる活動を行なうことが、本学会の今後の発展のために重要と考えます。そのためには、今後の役員人事や学会運営を含め、1) PhDとMD、および基礎と臨床のバランスを取ること、2) 基礎は臨床を、臨床は基礎を意識した発表を行い、双方が実りある「知的成果」を得るべく努力すること、3) 下垂体研究会や比較内分泌学会との連携をより強化すること、4) 神経内分泌学のアイデンティティを社会に認知してもらうべく、啓発活動や出版活動（学会主体の一般向け刊行物の発行など）を通して広がりのある学会運営を行なうこと、などが重要であると、個人的には考えます。会員諸氏の御意見を賜れば幸いです。



第39回日本神経内分泌学会学術集会のご案内

“ポストゲノム時代における神経内分泌学の挑戦”

会長 上 田 陽 一（産業医科大学医学部第1生理学）

第39回日本神経内分泌学会学術集会を本年9月28日(金)、29日(土)に“ポストゲノム時代における神経内分泌学の挑戦”をメインテーマに下記の通り、北九州国際会議場（北九州市小倉北区）で開催させていただきます。会期まで残すところ3ヶ月となり誠意準備を進めているところです。

今回の学術集会は、1日目（9月28日）午前は若手研究奨励賞受賞者の口演に始まり一般演題発表を、午後は特別功労賞および川上正澄賞授賞式・記念講演、特別講演では笹井芳樹先生（理化学研究所器官発生研究グループグループディレクター）に“間脳-下垂体系の発生の試験管内再現:基礎と応用研究の展望”と題して最新の研究成果をご講演いただきます。ポストゲノム時代にふさわしい挑戦的なご講演タイトルで大変楽しみです。

今回は2つのシンポジウムを企画しました。一つは、女性研究者の支援と活性化を目的に、シンポジウムの企画、座長、発表のすべてを女性にと西真弓先生（奈良県立医科大学第一解剖学教授）にお願いしました。また、学術集会の期間中に託児サービスを提供いたしますのでご利用下さい。もう一つは、臨床分野のアップデートに島津章先生（京都医療センター臨床研究センター長）に間脳・下垂体疾患に関するシンポジウムの企画をお願いしました。一日目終了後はリーガロイヤルホテル小倉にて懇親会を予定しておりますので皆様のご参加をお待ちしています。

2日目（9月29日）は、新企画 モーニングテクニカルセミナーで小澤一史先生（日本医科大学解剖学教授）に“光顕・電顕の免疫組織化学的染色法のコツ”をご講演いただきます。朝から脳を活性化させていただければ幸いです。午前は一般演題発表に続き、海外からの研究者による特別シンポジウムを企画しました。2014年にシドニーで第8回国際神経内分泌学会が予定されていますので、アジア・オセアニアにおける神経内分泌学の研究・臨床の現状と将来について考えるよい機会と思いました。北九州はアジア・オセアニアに近いという地の利を生かせます。基調講演にDr. David Grattan（オタゴ大学解剖学教

授、ニュージーランド）をお招きします。Dr. Grattan は Journal of Neuroendocrinology の Editor in Chief です。その後、アジア・オセアニアで活躍する若手研究者によるミニシンポジウムを予定しています。今後のアジア・オセアニア



における研究発展と国際交流に繋がるようなディスカッションができればと考えています。ランチョンセミナーでは千原和夫先生（兵庫県立加古川医療センター院長）にご講演いただきます。2日目午後から国際神経ペプチド学会日本支部（支部長:塩田清二先生（昭和大学医学部第一解剖学教授））と共催で特別シンポジウムが予定されており、9月30日は引き続き国際神経ペプチド学会日本支部主催の国際神経ペプチドシンポジウムが本会場となりのAIMビル（西日本総合展示場新館）において開催されます。

新たな試みも加えながら、内容の濃い学術集会になるようプログラムを考えました。アジアの玄関口、北九州で有意義な時を過ごしていただけるようスタッフ一同心よりお待ちしております。一般演題募集は、締め切りが6月30日(土)までとなっています。多くの演題応募をお待ちしております。

記

第39回日本神経内分泌学会学術集会の開催案内

開催期日：2012年9月28日(金)～9月29日(土)

開催場所：北九州国際会議場

(北九州市小倉北区浅野3-9-30)

抄録受付：2012年6月4日(月)

抄録締切：2012年6月30日(土)

抄録送付先：39JNS@mbox.med.uoeh-u.ac.jp

抄録登録詳細については下記学術集会事務局ホームページをご覧ください。

(<http://www.uoeh-u.ac.jp/kouza/1seiri/39JNS.html>)

■ 第3回国際神経ペプチドシンポジウムのご案内

塩 田 清 二 (昭和大学医学部第一解剖学)

本年9月29日、30日の両日ですが、第3回国際神経ペプチドシンポジウムが第39回日本神経内分泌学会学術集会(上田陽一会長)と共催で北九州小倉(北九州国際会議場およびアジア太平洋インポートマート(AIM)3階会議室)にて開催されます。この国際神経ペプチド学会(INPS)は米国のA. Kastin教授によって数年前に世界的な学会組織がつくれ、日本支部が設置されて支部活動として国際シンポジウムが2年おきに開催されてきました。第1回は2008年に東北大学の高橋和広教授が会長となり仙台で開催され、第2回は2010年に国立循環器病研究センターの南野直人部長が会長となり京都で開催をされました。

本年は、私がINPS日本支部の会長としてこの国際シンポジウムを北九州で開催させていただくことになりました。9月28日、29日と産業医大の上田教授が北九州で日本神経内分泌学会学術集会を主催されることから、29日の午後は特別シンポジウムとして両学会の合同シンポジウムが行われる予定です。午後の最初のセッションは「視床下部-下垂体系機能」というセッションが日本神経内分泌学会主催で開催されます。演者は、J. Morris (Oxford), W.K. Samson (St. Louis), M. Kawata (Kyoto), K. Tsutsui (Tokyo), K. Itoi (Sendai)の5名の予定です。次のセッションは「摂食調節」であり、INPS主催で開催されます。この「摂食調節」のセッションでは、摂食調節の基礎から臨

床応用研究について研究発表がされる予定です。演者は、H. Herzog (Sydney), Y. Minokoshi (Okazaki), K. Williams (Dallas), S. Shioda (Tokyo), A. Inui (Kagoshima)の5名が講演を発表する予定です。また、30日は午前の第1セッションが「血液脳関門」に関するものであり、W.A. Banks (Seattle), N. Nonaka (Tokyo), S. Dohgu (Fukuoka), C. Johansson (London)の4名が講演予定です。第2セッションは「VGFと関連ペプチド」に関するものでありS. Salton (New York), K. Sasaki (Osaka), Y. Nakazato (Miyazaki)などが講演者の予定です。さらに30日の午後のセッションでは、環太平洋のINPS支部の合同シンポジウムを南野先生が現在企画をしているところです。すでに日本以外から、中国、韓国、インド、オーストラリア支部からの代表が参加する予定になっています。



INPS国際神経ペプチドシンポジウムの詳細につきましては日本神経内分泌学会のホームページ上に掲載させていただく予定ですので、本学会員の方には是非多数のご参加をいただきたいと思います。

■ 第2回国際キスペプチン会議(<http://www.kp2012.jp/>)のご案内

第2回国際キスペプチン会議 local committee 広報担当

小澤 一史 (日本医科大学 大学院医学研究科 解剖学・神経生物学分野)

「Kisspeptin (キスペプチン)」は新たに発見された生理活性ペプチドで、生殖内分泌調節機構の中心であるGnRH (gonadotropin-releasing hormone) - gonadotropin (LH/FSH) - sex steroids (androgen, estrogen) といった神経内分泌軸の上流に位置し、GnRHの生理活性を制御する重要な役割を担うことが明らかになってきています。

元々は、ヒトにおいて遺伝的に低ゴナドトロピン性腺低形成症の患者にオーファン受容体の一つであるGPR54の遺伝子変異が近年発見され、GPR54が視床下部-下垂体-性腺軸(HPG axis)の活性化に重要な役割を担う可能性が明らかとなりました。その後、このGPR54に対するリガンドとしてkisspeptinが同定され、Kisspeptin-GPR54-GnRHという新しいラインが構築され、このシステムが「GnRHの活性化」、「思春期発動の誘導因子」、「HPG axisに対する性ホルモンのフィードバック機構の仲介の中心」、「代謝調節による生殖能」などに関わることが解析されています。実は、kisspeptinの発見同定については同時に、日本から武田薬品研究所の大瀧博士らが癌の転移抑制物質としての役割の観点から、metastin (メタスチン)を発見し報告されましたが、このmetastinとkisspeptinが実は同一物質であったのです。

2008年に第1回国際kisspeptin会議が、スペインのコルドバ大学を会場として開催されました。会長は、kisspeptin研究の第一人者である、Manuel Tena-Sempere教授が務められました。世界中から250名近いkisspeptin研究者、生殖神経内分泌学研究者が集合し、この新しい魅力的な新規生理活性ペプチドの研究成果について意見交換を行いました。この時に、大瀧博士は基調講演を行い、世界中の研究者がその発見に敬意を表しました。しかし、kisspeptinとmetastinの2つの名前が存在する不都合についても相談がなされ、このペプチドの主たる大きな役割を鑑み、世界的にはkisspeptinの名称でとらえようという流れが出来ました。その後、kisspeptin研究はさらに飛躍的に増加し、多数の報告がなされており、厳しい競争領域となっています。そんな中で、コルドバで開催された国際

kisspeptin会議の第2回目を是非、日本で開催しようという機運が2年ほど前から起こり、日本におけるkisspeptin研究の第一人者である名古屋大学大学院農学生命科学科の前多敬一郎教授(6月より東京大学教授に転任)、同大学の東村



博子准教授、東京大学理学研究科の岡良隆教授らを中心に国内のlocal committeeを構築、前多教授を会長として、岡教授をプログラム委員長として第2回国際kisspeptin会議開催を計画、第1回国際kisspeptin会議開催時の世界中の主要メンバーにも開催への協力を呼びかけました。

昨年3月11日の震災の影響が懸念されましたが、多くの研究者が第2回の日本開催に賛意を示してくださり、最終的に本年、2012年(平成24年)11月6日(火)~9日(金)にかけて、今夏新しく東京大学内にオープンする「伊藤国際学術研究センター」(イトーヨーカドーの全面的な寄付による新しいホールです。東大赤門のすぐ横に完成予定)を会場に、第2回国際kisspeptin会議“2nd World Conference on Kisspeptin ~ Signaling in the Brain ~”(http://www.kp2012.jp/)を開催することが決定しました。シンポジウムには「Kisspeptinと思春期」、「KisspeptinによるGnRHニューロンの制御」、「Kisspeptin/NKB/dynorphin共存ニューロン」、「Kisspeptinニューロンとステロイドホルモン」など、多岐にわたる魅力的なテーマを予定しており、世界中の著名なkisspeptin研究者が一堂に会する予定です。しかし、なんといっても国際学会を成功するためには、ホスト国である、日本の研究者の参加が大きなポイントとなります。Kisspeptin研究はエネルギー代謝制御、ストレス応答、時間遺伝子などの研究と関係して広がりを見せています。日本神経内分泌学会の会員の方々には十分に興味を持って、また納得していただける基礎情報を得ていただける機会と思います。多くの皆さんの参加をお待ちし、またお願いしたいと思います。

■ 第14回国際組織細胞化学会議のお知らせ

河田 光 博 (京都府立医科大学 大学院医学研究科 解剖学教室生体構造学部門)

第14回国際組織細胞化学会議 14th International Congress of Histochemistry and Cytochemistryが2012年 8 月 26 日～29 日、京都国際会館において開催され、28 日(火)には「Neurobiology of Social Behavior」と題したワークショップ(オーガナイザー:西真弓、Hailan Hu)が予定されています。演者は西真弓(奈良県立医科大学)、Stephan Gammie (University of Wisconsin)、黒田公美(理化学研究所)、Hailan Hu (Chinese Academy of Science)です。

また29日(水)には「Hormone and Brain」(オーガナイザー:河田光博、John Morris)と題したシンポジウムが予定さ

れています。演者は John Morris (Oxford Univ.)、Kyungjin Kim (Seoul National Univ.)、上田陽一(産業医科大学)、小澤一史(日本医科大学)、河田光博(京都府立医科大学)です。

いずれも、この領域で活躍されている方々ばかりですので、興味のある方はご参加下さい。
<http://www.acplan.jp/ichc2012/>



■ 第36回日本比較内分泌学会大会・シンポジウム報告

大会長 竹 井 祥 郎 (東京大学大気海洋研究所)

平成23年 11月23日～25日の3日間、永田町にある都道府県会館において標記大会・シンポジウムを開催した。今回は、「内分泌学ウィーク2011」として、日本神経内分泌学会、日本内分泌病理学会と同じ会場でリレー開催をした。日本神経内分泌学会には本学会会員も多数おられるが、この機会を捉えて本学会を紹介したい。日本比較内分泌学会は、1975年に設立された歴史のある学会で、日本神経内分泌学会と同様に日本内分泌学会の分科会のような形で始まったと聞いている。その第1の特色は、理学、農学、医学、薬学など異なる分野の会員が参加する学際性にある。また、生き物が好きで研究することを夢見ている若い会員が多いことも特色である。

今回の大会では、まず大会前日(22日)に「若手交流会」を開催した。これは会員以外も自由に参加できる集いで、この研究分野に興味を持つ若者を増やすことが目的である。55名の参加者があり、その後の懇親会にも37名が参加して盛会だったと聞いている。翌日から始まった本大会には約200名の参加があり、23日のメニューは、学術企画委員会主催シンポジウム、ポスターセッション、実行委員会が主催するシンポジウム、と内容が豊富であった。24日には、議論を尽くしてもらうためポスターセッションを再び行い、午後には「若手口頭発表」を行った。その後の総会では、「若手最優秀発表賞」の表彰があった。懇親会には、3学会で202名(学会から114名:一般73名、学生41名)

が参加して盛会であった。25日には、公開国際シンポジウムを3学会合同で開催した。

若手口頭発表14題を含む98の一般演題のうち、脊椎動物では円口類1題、魚類34題、両生類20題、鳥類7題、哺乳類19題であり、無脊椎動物では脊索動物5題、棘皮動物4題、節足動物4題、軟体動物3題、扁形動物1題であった。この多様性が比較内分泌学会の特色である。また、学生から引退した大家まで幅広い年齢層の発表があった。「若手口頭発表」を開催した目的の一つに、「比較内分泌学会には優れた研究能力を持つが職が見つからない若手研究者が大勢いる」ことを医学系の学会に宣伝したいという思いがあった。そこで、懇親会でも屋代先生にお願いをして自己紹介の機会を作っていた。また、内分泌学ウィークの主題である「他学会を知ることにより自学会のよさを知る」ことに関しても成果があったが、今後はより交流を深める工夫が必要であると感じた。私個人は、1980年ごろに日本神経内分泌学会初代会長であった川上正澄先生から、「評議員にするから会員になるように」という電話を受けて以来の会員であるが、これまでは比較内分泌学会が中心になっていた。しかし、今後は2つの学会に参加できる内分泌学ウィークのような試みが増え、共に刺激し合いながら発展できるこ



とを期待している。

最後に、日本神経内分泌学会の加藤幸雄会長、日本内分泌病理学会の山田正三会長、および「内分泌学ウィーク2011」を実質的に運営した自治医大の屋代隆教授のご努力

で、内分泌学ウィークを大過なく無事に終えることができた。参加してくれた多くの会員をはじめ、大会を支えてくれた皆様に心からお礼を申し上げる。

■ 内分泌学ウィーク2011「公開国際シンポジウム」報告

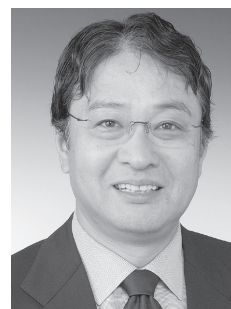
屋代 隆（自治医科大学医学部解剖学講座） ■

2011年11月22、23、24、25日の日程で、東京都千代田区の都道府県会館を会場として、三つの内分泌学系の学会を同じ場所で同じ時期にリレー開催する「内分泌学ウィーク2011」が行われた。関連する学会を同じ時期に同じ場所で開催すれば、参加者の利便性を高めることができ、さらに合同学術集会ではない「ウィークリレー開催」であれば、それぞれの学会の独自性を尊重することができる。このような趣旨のもと、第38回日本神経内分泌学会（加藤幸雄会長、明治大学農学部）、第36回日本比較内分泌学会（竹井祥郎大会長、東京大学大気海洋研究所）、第15回日本内分泌病理学会（山田正三会長、虎の門病院）の三学会で内分泌学ウィーク2011を構成することとなった。

三大会長と本ウィークのコーディネーターを務めた小生らで準備に入った。それぞれの学会はそれぞれ独立して開催するが、シンポジウムは合同で開催しよう、との合意を得た。たまたま、自治医科大学の大学院プログラム（文部科学省採択事業「全人的ながん医療の実践者養成」）とジョイントすることが可能となり、公開シンポジウムをウィーク内で開催することに成功、外国から著明な演者を招待することができた。各大会長の推薦で招待演者を決め、また各大会長が司会を務めた実質上の合同シンポジウムである。当日は日本医学会会長の高久史磨先生に来ていただき、スピーチを頂戴することができた。

シンポジウムタイトルは「内分泌器官と幹細胞—組織発生と腫瘍発生—」である。内分泌腫瘍は多様な臨床病理像を有し、産生ホルモンの種類、臨床症状、病理形態像等の面で多様性が認められる。良性腫瘍であっても臨床的には一般に悪性度が高く、悪性腫瘍そのものも多数存在する。産生されるホルモンそのものによって、多様な症状を呈するという、他の一般の腫瘍とは異なる側面を持っている。

本シンポジウムは正常内分泌組織および腫瘍同組織の発生母体となる Stem Cell の観点から、内分泌腺の本態を探ろうとするものである。三大会長等による準備委員会で、20名数名の候補者の中から最終的に4名プラス1名の演者を選



定した。全ての招待演者が喜んで講演を引き受けていただいた。演者、講演タイトルは以下のとおりである。

Special Symposium Lecture

Endocrine Research and Its Creativity by Kalman Kovacs, MD, PhD (University of Toronto, Canada)

Symposium Lecture

Germline Stem Cells in the Ovary of the Teleost Medaka by Minoru Tanaka, PhD (National Institute for Basic Biology, Japan)

Pituitary Stem Cells and Tumor Stem Cells by Hugo Vankelecom, PhD (University of Leuven, Belgium)

Thyroid Tumor and Stem Cell by Shioko Kimura, PhD (National Institutes of Health, USA)

Pituitary Development and Tumorigenesis by Sylvia L. Asa, MD, PhD (University Health Network, Toronto, Canada)

各演者とも、それぞれの立場から大変有意義な講演いただき討議も活発に行われ、そして成功裏に終了した。本公開国際シンポジウムの開催にご援助いただいた多くの皆様に心から感謝を申し上げます。

第38回日本神経内分泌学会学術集会・若手シンポジウム報告

塚原伸治 (埼玉大学大学院 理工学研究科 生命科学部門)

第38回日本神経内分泌学会学術集会は、内分泌学ウィーク 2011 の一環として、第15回日本内分泌病理学会学術総会と第36回日本比較内分泌学会大会に続いて開催されました。同学術集会の若手シンポジウムは内分泌学ウィークの最終プログラムでしたが、多くの参加者を得て盛況のうちに終わることができました。学会開催を遡ること半年前、大会長である明治大学の加藤幸雄先生から、若手研究者でシンポジウムを企画してみないかと光栄にもお話をいただきました。加藤先生からは、内分泌学のさらなる発展と活性化を図るため、神経内分泌だけでなく下垂体や比較内分泌の研究分野の若手研究者を招聘したシンポジウムを企画してほしいとのご要望を承っておりまして、要望に応じて良いシンポジウムを企画するため、オーガナイザーとして京都府立医科大学の松田賢一先生にご協力を仰ぐことに致しました。松田先生とともに企画したシンポジウム「“かたち”と“もの”からアプローチする神経内分泌研究」では、生理機能発現の基盤である形態構造（かたち）とホルモンや神経伝達物質などの生理活性物質（もの）について精力的に研究を進めている5名の若手研究者（京都府立医科大学 森浩子助教、岡山大学 坂本浩隆准教授、自治医科大学 藤原研講師、埼玉大学 坂田一郎助教、広島大学 浮穴和義准教授）から最新の研究成果を発表していただきました。森先生は、視床下部腹内側核のエストロゲン受容体 α 発現細胞の分布パターンが胎生期の子宮内環境によっ

て影響を受けること話されました。また、彼女自身が発見した視床下部腹内側核近傍に位置する新たな性的二型核（sagittalis nucleus of the hypothalamus）も紹介されました。私は脳の性分化機構に興味を持っているので、この発見にはとても驚かされた記憶があります。坂本先生は、勃起や射精といった雄性機能に関与する脊髄ガストリン放出ペプチドニューロン系に関する一連の研究成果を発表されました。ガストリン放出ペプチドニューロンによって構成される脊髄の局所回路には雄優位な性差がみられることや視床下部室傍核のオキシトシンニューロンがガストリン放出ペプチドニューロンの機能調節に関わることなど、緻密な研究成果に基づいて説明されました。浮穴先生は、鳥類の視床下部漏斗部に特異的に発現する新規遺伝子を発見し、新規遺伝子の発現調節や機能に関する多彩な研究成果を発表されました。視床下部漏斗部は摂食調節中枢の一つであるので、摂食調節に関わる新たな分子の同定に繋がると思います。引き続き、浮穴先生の研究に注目してゆきたく思います。最後になりますが、シンポジウム企画の機会を与えて下さった加藤大会長をはじめとする多くの大会運営関係者、シンポジウムにご参加頂いた会員の皆様方に厚く御礼を申し上げます。



■ 第38回日本神経内分泌学会学術集会・若手シンポジウム報告

松 田 賢 一（京都府立医科大学 大学院医学研究科 生体構造科学）

第38回日本神経内分泌学会学術集会において企画させていただいた、若手シンポジウム「“かたち”と“もの”からアプローチする神経内分泌研究」について、ご報告申し上げます。

私は、会長の加藤幸雄先生よりオーガナイズを依頼された塚原伸治先生（埼玉大学）のお誘いにより、共同で若手シンポジウムの企画を担当させていただくことになりました。私も塚原先生も形態学を基盤に神経内分泌研究を行っており、常日ごろ“かたち”の重要性を話しているところでした。形態研究は、生理活性物質、すなわち“もの”の理解があって大きな意味をなすものであります。そこで若手シンポジウムでは、本分野の根幹を再認識し今後の展開を考える機会としたいと考え、上記のテーマにいたしました。

演者として、私の共同研究者でもある森浩子先生（京都府立医科大学）、坂本浩隆先生（岡山大学）と、藤原研先生（自治医科大学）、坂田一郎先生（埼玉大学）、浮穴和義先生（広島大学）に講演をお願いしました。藤原先生は、組織形態学的観察から下垂体前葉におけるレチノイン酸合成酵素の存在を証明し、それをもとにレチノイン酸の下垂体前葉細胞へのオートクライン/パラクライン作用解明へ展開する研究をお示しく下さいました。坂田先生は、新規グレリン産生細胞株の樹立、細胞株を用いたグレリン産生機構の解

析を報告くださいました。浮穴先生は、ニワトリ視床下部から新たなペプチドを同定し、摂食との関連性を証明する過程、まさに“ものとり”研究の真骨頂をお話くださいました。

“かたち”と“もの”について多方向からの研究を拝聴し、その重要性を再確認することができました。一方で、質の高い研究を展開するには多角的な解析が要求されており、本学会における更なる有機的交流が研究の進展、ひいては神経内分泌分野の発展につながるのではと感じました。お陰様で、多くの方に参加いただきました。最後に総合討論の時間をとり、“かたち”と“もの”研究を牽引されてきたシニアの先生方から叱咤激励や若手先生から今後の展開について意見をいただきましたのですが、最終日の最後のプログラムなので時間の都合上できなかったのが多少心残りです。今後、機会があれば、そのような意見交換をできる企画をさせていただければ誠に幸甚に存じます。

最後に、本シンポジウム企画の機会をお与えくださった加藤幸雄先生ならびに学会関係者の皆様にあらためてお礼申し上げます。



■ 編集後記

企画広報担当常務理事 上 田 陽 一（産業医科大学医学部第1生理学）

Newsletter No.16をお届けします。巻頭言はこれまで歴代理事長をお願いしておりましたが、本号より4名の常務理事で順次担当することになりました。まず、岩崎泰正常務理事にお書きいただきました。

本号では昨年平成23年11月に開催されました第38回日本神経内分泌学会学術集会での若手シンポジウムの報告、第36回日本比較内分泌学会大会の報告、内分泌学ウィーク2011での公開国際シンポジウム報告そして今年8月以降に開催されます4件の学会案内などを掲載しております。

第39回学術集会（9月28日（金）、29日（土）、北九州国際会議場）へのご参加と演題応募と9月30日（日）に引き続き開催されます第3回国際神経ペプチドシンポジウム（国際神経ペプチド学会日本支部主催）へのご参加をお待ちしております。

■ 事務局からのお願い ■

●2012年度の新評議員の推薦（申請）を受け付け中です。論文数等の条件を満たす方は是非とも評議員としてご活躍ください。選考規定・関係書式はホームページ（<http://www.nacos.com/jns/>）にあります。7月末日までに事務局に届くようお送りください。

●年会費は年度始めに送付いたします振込用紙にてお支払いいただくようお願いしておりますが、紛失された際は事務局までご請求いただくか、ゆうちょ銀行に備え付けの振込用紙にて通信欄に会員番号・年度を明記の上、下記の口座にお振込み下さい。

口座番号：01030-7-18042

加入者名：日本神経内分泌学会

ニホンシンケイナイブンプイガッカイ

未納分の会費額や会員番号がご不明の方は、お問い合わせ下さい。

なお、会員番号は本会からお送りいたします郵便物の宛名ラベルにも記載してあります。また、日本内分泌学会の会員の方は、日本内分泌学会の会員の会員番号が分科会の会員番号となっております。

●繰り返し会費納入をお願いしても長期（3年以上）にわたって会費を滞納されている方は「自動的に退会」していただくことになりました。「自動的に退会」なる前に、事務局から最後のお願いを差し上げますので、是非会員として残られるようご検討ください。

神経内分泌学の領域は全身の内分泌機構の統合制御機能のみならず、エネルギー代謝、生殖、性行動、ストレス反応、体温、摂食、体液バランスの調節機構など幅広い領域をカバーし、その生理、病態生理および臨床面から新しい研究が次々に展開されています。会員の皆さまのご意見をもとに今後あらためて積極的な学会活動を行うよう種々の企画を進める予定ですので、ぜひとも会員資格を継続され本学会の発展のためにご協力下さい。

●事務局からの連絡は、業務効率化のため極力電子メールを用いるようにしております。電子メールアドレスをお届けできない先生は、下記の事務局までメールでご連絡下さい。また、ご自宅や勤務先の住所変更の際には必ずお知らせくださるようお願いいたします。（日本内分泌学会と共通のデータベースを使用しておりますので、内分泌学会にお届けの方は連絡不要です）

日本神経内分泌学会事務局

〒604-8111 京都市中京区三条通柳馬場西入ル樹屋町75番地

日本生命京都三条ビル3階 日本内分泌学会内

日本神経内分泌学会

Phone：075-229-8252 Fax：075-229-8251 E-mail：jnes@wine.ocn.ne.jp

担当：小南 悟郎、伊佐 潤子

《住所の英語表記》

Japan Neuroendocrine Society

The 3rd Floor, Nihon Seimei Kyoto Sanjo Building

75 Masuya-cho

Sanjo Yanaginobamba-nishiiru, Nakagyo-ku,

Kyoto 604-8111 JAPAN

■ 役員リスト ■

大 磯 ユタカ	理事長	名古屋大学大学院 医学研究科 糖尿病・内分泌内科学
島 津 章	理事（庶務）	国立病院機構京都医療センター 臨床研究センター
芝 崎 保	理事（庶務）	日本医科大学大学院 医学研究科 生体統御科学
森 昌 朋	理事（庶務）	群馬大学大学院 医学系研究科 病態制御内科学
井 樋 慶 一	理事（庶務）	東北大学大学院 情報科学研究科 情報生物学分野
岩 崎 泰 正	理事（会計）	高知大学 保健管理センター
須 田 俊 宏	理事（会計）	青森労災病院
千 原 和 夫	理事（会計）	兵庫県立加古川医療センター
有 田 順	理事（会計）	山梨大学大学院 医学工学総合研究部 第一生理
上 田 陽 一	理事（企画広報）	産業医科大学 医学部 第一生理学
中 尾 一 和	理事（企画広報）	京都大学大学院 医学研究科 内科学内分泌代謝内科
杉 原 仁	理事（企画広報）	日本医科大学 第三内科
中 里 雅 光	理事（次世代育成）	宮崎大学 医学部 内科学講座 神経呼吸内分泌代謝学
寒 川 賢 治	理事（次世代育成）	国立循環器病研究センター研究所
河 田 光 博	理事（次世代育成）	京都府立医科大学大学院 医学研究科 生体構造科学部門
加 藤 幸 雄	理事（次世代育成）	明治大学農学部 生命科学科遺伝情報制御学
佐久間 康 夫	監事	東京医療学院大学
前 多 敬一郎	監事	名古屋大学 大学院 生命農学研究科 生殖科学研究分野

（以上 18名）

■ 名誉会員リスト ■

新 井 康 允	井 端 泰 彦	井 村 裕 夫	入 江 實	加 藤 順 三
加 藤 讓	貴 邑 富久子	齋 藤 壽 一	佐 野 豊	鎮 目 和 夫
高 橋 迪 雄	高 原 二 郎	出 村 博	廣 重 力	牧 野 恒 久
松 尾 壽 之	松 倉 茂	山 下 博	吉 田 尚	

（以上 19名）

■ 功労評議員リスト ■

井 口 昭 久	石 井 淳	石 居 進	井 上 金 治	井 上 修 二
大 郷 勝 三	沖 充	久 保 勝 知	佐々木 英 夫	鈴 木 光 雄
高 野 加寿恵	田 辺 清 男	谷 口 洋	中 井 康 光	中 井 義 勝
中 林 肇	橋 本 浩 三	本 間 研 一	牧 野 英 一	本 松 利 治
森 下 一	森 本 靖 彦	柳 瀬 昌 弘	山 路 徹	吉 見 輝 也

（以上 25名）

功労評議員 藤田恒夫先生は、2012年 2 月 6 日逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

■ 2011年度 新入会員 ■

市原 淳 弘	東京女子医科大学 内科学（第二）講座
小川 秀一郎	京都大学大学院 医学研究科 分子腫瘍学
越智 拓 海	岡山大学 理学部附属臨海実験所
菊地 元 史	自治医科大学 医学部 教育学
小塚 智沙代	琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座
澤田 圭 介	東北大学 情報科学研究科 情報生物学
隅田 健太郎	神戸大学 医学部医学研究科 糖尿病・内分泌内科学
田中 良 法	東京大学 大学院農学生命科学研究科 獣医生理学教室
Depicha Jindatip	自治医科大学 医学部 解剖学講座 組織学部門
西山 充	高知大学 医学部 内分泌代謝・腎臓内科
萩原 大 輔	名古屋大学 大学院医学系研究科 糖尿病・内分泌内科学
堀井 謹 子	奈良県立医科大学 第一解剖学教室
松野 彰	帝京大学ちば総合医療センター 脳神経外科
峯岸 敬	群馬大学 大学院医学系研究科 器官代謝制御学講座 産科婦人科学
宮田 清 司	京都工芸繊維大学 大学院 応用生物学部門
森田 晶 子	京都工芸繊維大学 大学院 応用生物学部門 生体機能学研究室
山田 俊 児	京都府立医科大学 生体構造科学
山内 啓太郎	東京大学 大学院農学生命科学研究科 獣医生理学教室
吉村 充 弘	産業医科大学 医学部 第1生理学

(以上 19名)

■ 賛 助 会 員 ■

キッセイ薬品工業株式会社	〒103-0022	東京都中央区日本橋室町1-8-9
塩野義製薬株式会社	〒561-0825	大阪府豊中市二葉町3-1-1
帝人ファーマ株式会社	〒100-8585	東京都千代田区霞が関3丁目2番1号 霞が関コモンゲート西館
日本イーライリリー株式会社	〒651-0086	神戸市中央区磯上通7-1-5 三ノ宮プラザビル
ノバルティスファーマ株式会社	〒106-8618	東京都港区西麻布4-17-30
ノボノルディスクファーマ株式会社	〒100-0005	東京都千代田区丸の内2-1-1 明治安田生命ビル
ファイザー株式会社	〒151-8589	東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル
三菱化学メディエンス株式会社	〒108-8559	東京都港区芝浦4-2-8

(以上 8 社)

日本内分泌学会 分科会
日本神経内分泌学会 定款

施行	昭和56年 6月 5日
一部改正	昭和59年11月 3日
〃	平成 2年10月31日
〃	平成 6年12月 3日
〃	平成 9年11月 8日
〃	平成11年10月29日
〃	平成14年10月11日
〃	平成15年 9月11日
〃	平成16年10月 9日
〃	平成17年 7月 8日
〃	平成18年10月27日
〃	平成19年 8月 4日
〃	平成23年11月25日

第1条 本会は日本神経内分泌学会（Japan Neuroendocrine Society）と称する。

第2条 本会の事務局は理事会の指定する場所におく。

（目的）

第3条 本会は神経内分泌学の進歩・向上をはかることを目的とする。

（事業）

第4条 本会は次の事業を行なう。

1. 学術集会の開催
2. 国際交流の促進
3. 国際的研究者の育成
4. その他、本会の目的達成に必要な事項

（会員）

第5条 本会の会員を次のように分ける。

1. 一般会員
2. 名誉会員
3. 賛助会員

第6条 一般会員は本会の目的に賛同し、所定の年会費を納入した者で、その年度の学術講演会での講演発表の権利を有する。また3年連続して会費を納入しなかった者は会員の権利を失う。

2. 一般会員が退会を希望するときは、理由を付して退会届を理事長に提出しなければならない。

第7条 名誉会員は本会の目的に関し特に功績のあった者で理事会が推薦し、評議員会の承認を得て決定し、総会に報告する。

2. 名誉会員は一般会員と同等の資格および権利を有するが会費は免除される。

第8条 賛助会員は本会の目的に賛同し、賛助会費を納入した個人または団体である。

第9条 一般会員および賛助会員の会費は理事会で立案し、評議員会と総会の承認を得る。

（役員）

第10条 本会に次の役員を置く。

1. 理事 若干名（うち理事長1名）
2. 監事 2名

（役員を選任）

第11条 理事は評議員の投票または理事長の推薦により評議員会および総会の承認を得て選任する。理事長の推薦による理事は原則3名とするが、必要に応じ若干名を追加することができる。

2. 理事は互選で理事長を定める。
3. 監事は理事長が推薦し、評議員会および総会の承認を得るものとする。

（理事の職務）

第12条 理事長は、本会を代表し会務を統轄する。

2. 理事長に事故があるとき、又は理事長が欠けたときは、あらかじめ理事長が指名した順序により、理事がその職務を代理し、又はその職務を行う。
3. 理事は理事会を組織して、この定款に定めるもののほか、本会の総会の権限に属する事項以外の事項を議決し、執行する。
4. 理事は理事長の業務を補佐する。
5. 理事長は必要に応じ、本会の運営に必要な研究賞選考委員会などの諸種委員会の設置および委員の委嘱を行なうことができる。

（監事の職務）

第13条 監事は本会の業務および財産を監査する。

2. 監事は理事会に出席する。

（役員任期）

第14条 理事長の任期は4年とする。

2. 理事の任期は2年とする。評議員の投票または理事長の推薦により再選された場合には再任を妨げない。
3. 監事の任期は2年とする。連続する場合は1期に限り再任できる。
4. 役員任期は学術集会時の総会の日からはじまり、それぞれ定められた任期を経た後の学術集会時の総会の日をもって終了する。
5. 役員は65歳の誕生日を迎えた後は、現在の任期を終了した後、更に再任されることはない。

(理事会)

第15条 理事会は理事長が召集する。

2. 理事会の議長は理事長とする。

第16条 理事会は理事の現在数の3分の2以上の者が出席しなければ、議事を開き議決することは出来ない。ただし、当該議事につきあらかじめ書面をもって意志表示した者および他の理事を代理人として表決を委任した者は、出席者としてみなす。

2. 理事会の決定は出席者の過半数による。可否同数の時は、理事長が決する。
3. 理事長は出席が必要と認めた者を、オブザーバーとして理事会に出席させることができる。

(評議員、功労評議員の選出および任期)

第17条 評議員は評議員2名以上の推薦に基づき、理事長が理事会に諮り、評議員会の議を経て定め、学術集会時の総会の承認を得るものとする。

2. 評議員の任期は4年とし、再任を妨げない。ただし、再任は理事会において審議し、評議員会および総会の承認を得るものとする。
3. 評議員は4年の任期を満了しない場合でも、65歳の誕生日を迎えた後の学術集会時の総会の日をもって任期を終了する。
4. 功労評議員は、第17条3項により任期を終了した評議員で、議員歴10年以上の経歴を有し本会に功労のあった者の中から、理事会の議決を経て推薦される。

(評議員、功労評議員の職務、権利)

第18条 評議員は評議員会を組織して、理事長および理事会の諮問事項、その他本会の運営に関する事項を審議する。

2. 功労評議員は、評議員会に出席できるが、評議員会の表決に加わることができない。理事長は、必要があると認めた時は、功労評議員に対し意見を求めることができる。功労評議員は本会会費を免除される。

(評議員会)

第19条 評議員会は年1回、学術集会時の総会に先立って、理事長が召集する。但し、正当な理由がある場合は、総会と合同で開催できるものとする。

2. 評議員会の議長は、出席議員の互選により定める。

第20条 評議員会は、評議員現在数の3分の2以上の者が出席しなければ、議事を開き議決することができない。ただし、当該議事につきあらかじめ書面をもって意志表示したものおよび他の評議員を代理人として表決を委任した者は、出席者としてみなす。

2. 評議員会の決定は出席評議員の過半数による。可否同数のときは、議長が決する。

(総会)

第21条 総会は会員をもって組織する。

第22条 総会は学術集会時を含めて少なくとも年1回、理事長が召集し開催する。

2. 臨時総会は、理事会が必要と認めたとき、理事長が召集する。

第23条 総会の議長は出席会員の互選により定める。

第24条 総会は理事会と評議員会における審議事項を議決する。

第25条 総会は会員現在数の3分の1以上の者が出席しなければ、議事を開き議決することができない。ただし、当該議事につきあらかじめ書面をもって意志表示したものおよび他の会員を代理人として表決を委任した者は、出席者としてみなす。

2. 総会の決定は出席会員の過半数による。可否同数のときは、議長が決する。

(会長)

第26条 会長はその年度の学術集会に関わる任務を遂行すると同時に、日本内分泌学会との十分な連絡を図るため、日本内分泌学会理事会にオブザーバーとして出席する。

第27条 会長は理事会において推薦し、評議員会および総会の承認を得て決定する。

第28条 会長の任期は1年とし、前回学術集会の終了翌日から学術集会終了の日までとする。

(学術集会)

第29条 学術集会は毎年1回、秋に開催する。またその内容は本会として特色あるものとする。

第30条 学術集会に発表する者は、会員であることを必要とする。ただし、本会の主旨に賛同する非会員で会長が承認した場合には発表を行なうことができる。

(表彰)

第31条 神経内分泌学の領域において優れた業績をあげた研究者に対し、別に定める規程に基づき、研究賞を授与する。また、基礎的研究の発展を推進するために若手研究助成金制度を設け、別に定める規程に基づき助成を行う。

2. 本会の目的の達成または事業の遂行に関し特段の功績のあった者に対し、別に定める規程に基づき、特別功労賞を授与する。

(国際神経内分泌連盟)

第32条 本会は International Neuroendocrine Federation (国際神経内分泌連盟) に加盟し、年会費を負担する。

(会計)

第33条 本会の運営には次の資金をあてる。

1. 会費
2. 寄付金
3. 資産から生ずる収入
4. その他の収入

2. 年度会計の報告は監事の監査を経た後、理事会、評議員会並びに総会にはかり承認を得る。

3. 会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(会則の変更など)

第34条 本会則の変更および細則の作成には理事会および評議員会の議を経て総会の承認を得る。

(附則)

第35条 本会則は平成11年10月29日より施行する。

日本神経内分泌学会 定款施行細則

施行 平成12年10月13日

一部改正 平成14年10月11日

一部改正 平成23年11月25日

(役員)

第1条 定款第11条に定める評議員による理事選出は、理事長が委嘱した選挙管理委員会の管理下に郵便により行なう。

2. 選挙の結果、得票数が同数となった場合は会員歴の長い者を選任するものとする。

第2条 選挙により理事に選任された者が任期の途中で辞任したときは、投票で次点となった者を繰り上げて、評議員および総会で承認を得て理事に選任する。

この場合の任期は前任者の残任期間とする。

(会務の担当)

第3条 理事長は理事から庶務担当、会計担当、次世代育成担当および企画・広報担当の理事それぞれ複数名を任命する。

第4条 理事長は日本神経内分泌学会の代表者としてInternational Neuroendocrine Federation (国際神経内分泌連盟)のcouncil memberを兼任する。但し、Executive Committee Member に選ばれた場合には、その任期(4年)が終了するまで新理事長代理としてExecutive Committeeに出席する。

第5条 庶務担当理事は次の事項を担当する。

(1) 会員に関する事項

入会、退会、会員の認定

(2) 評議員に関する事項

評議員の選出に関する手続き、評議員会の議案と記録

(3) 理事会に関する事項

理事会の議案と記録

理事の選出に関する手続き

(4) 記録の保管と雑誌への掲載

(5) 外部との折衝に関する事項

(6) 学術集会に関する事項

(7) その他、庶務に関する事項

第6条 会計担当理事は次の事項を担当する。

(1) 現金の出納および保管

(2) 会費の請求および収納

(3) 予算および決算に関する事項

(4) 会計帳簿および証書類の整理および保管

(5) その他、会計資産に関する事項

第7条 次世代育成担当理事は次の事項を担当する。

(1) 学術賞の受賞候補者を選出し、理事会に答申する。

(2) その他、次世代育成に関する事項

第8条 企画・広報担当理事は次の事項を担当する。

(1) 学会の運営と事業の企画・立案に関する事項

(2) 学会の運営と事業について学会員および関係する各方面への広報活動

(年次学術集会)

第9条 年次学術集会は、第 回日本神経内分泌学会学術集会と呼称する。

第10条 年次学術集会の会期は原則として2日とする。

第11条 年次学術集会における講演抄録は、日本内分泌学会雑誌に掲載し会員に配布する。

第12条 年次学術集会の経費は、本会の学術集会費などをもって充てる。会長は収支決算書を作成し、理事長に報告する。

(細則の変更など)

第13条 会則及び細則施行に関し必要な規定は、理事会の議を経てその都度別にこれを定める。

第14条 本細則を改正するためには、理事会、評議員会及び総会の議決を経なければならない。

第15条 本細則は、平成12年10月13日より適用する。

Norditropin®
FlexPro®



新発売

ヒト成長ホルモン(遺伝子組換え)製剤

薬価基準収載

ノルディトロピン® フレックスプロ® 注

5mg
10mg
15mg

Norditropin® FlexPro®

一般名:ソマトロピン(遺伝子組換え)

処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」等につきましては、添付文書をご参照下さい。



製造販売元 (資料請求先)

ノボ ノルディスク ファーマ株式会社

〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-1-1 明治安田生命ビル
www.novonordisk.co.jp

2-1-3418-01-01
2010年10月作成



遺伝子組換え天然型ヒト成長ホルモン製剤

【薬価基準収載】

ジェントロピン® ゴークイック 注用 5.3mg・12mg

Genotropin® GoQuick Inj. 5.3mg・12mg

注射用ソマトロピン(遺伝子組換え)

処方せん医薬品:注意—医師等の処方せんにより使用すること

「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」等は添付文書をご参照ください。

製造販売

ファイザー株式会社

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7
資料請求先:製品情報センター

2011年10月作成



- **シンプルなアナログ式**
アナログ式だから見やすく、操作が簡単になりました。
- **製剤含量 (6mg/12mg) 別の専用ペン**
それぞれのカートリッジをペンにセットするだけ。複雑な初期設定は要りません。
- **詳細な投与量設定刻み**
投与量は6mg用ペンなら0.025mg刻み、12mg用ペンなら0.05mg刻みになりました。患者さんの体重に合わせ、より適切な投与量を設定できます。
- **1回最大投与量は3.00mg**
12mg用ペンなら、1回の最大投与量が3.00mgです。体重60kgまでのターナー症候群および軟骨異栄養症の患者さんにも対応できます。
- **安全性と患者心理に配慮した針隠しカバー標準搭載**
患者さんの注射に対する恐怖心を軽減し、安全性に配慮した針隠しカバーを標準搭載しました。

管理医療機器
医薬品ペン型注入器

ヒューマトローペン® 6mg

HumatroPen® 6mg

ヒューマトローブ®注射用6mgカートリッジ専用

認証番号: 221ADBZX00111000

ヒューマトローペン® 12mg

HumatroPen® 12mg

ヒューマトローブ®注射用12mgカートリッジ専用

認証番号: 221ADBZX00112000

*ヒューマトローペン®6mgおよび12mgのご使用に際しては、添付文書および取扱説明書をよくお読みください。

*ヒューマトローブ®注射用6mgおよび12mgの「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「副作用」等の詳細については添付文書をご参照ください。

ヒューマトローペン®6mg・ヒューマトローペン®12mgは日本イーライリリー株式会社のヒト成長ホルモン製剤カートリッジ専用の医薬品ペン型注入器です。

製造販売元〈資料請求先〉

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086 神戸市中央区磯上通7丁目1番5号

Lilly Answers リリーアンサーズ

日本イーライリリー医薬情報問合せ窓口

0120-360-605 *1 (医療関係者向け) 受付時間: 月曜日～金曜日 8:45～17:30**2

*1 通話料は無料です。携帯電話、PHSからもご利用いただけます。 *2 祝祭日および当社休日を除きます。



遺伝子組換え天然型ヒト成長ホルモン製剤

処方せん医薬品 (注意—医師等の処方せんにより使用すること)

〈薬価基準収載〉

グロウジェクト® 注射用 1.33mg

グロウジェクト® 注射用 8mg

グロウジェクト® BC 注射用 8mg

注射用ソマトロピン (遺伝子組換え)

本剤のご使用にあたり、禁忌、効能・効果、用法・用量、使用上の注意等については、製品添付文書をご覧ください。

製造販売元 (資料請求先)

日本ケミカルリサーチ株式会社

〒659-0021 兵庫県芦屋市春日町3-19



効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等については、製品添付文書をご参照ください。



持続性ソマトスタチンアナログ マイクロスフェア型徐放性製剤

薬価基準収載

10mg
20mg
30mg

サンドスタチン[®] LAR[®] 筋注用

製薬 処方せん医薬品

注意—医師等の処方せんにより使用すること

Sandostatin[®] LAR[®]

オクトレオチド酢酸塩徐放性製剤

製造販売

(資料請求先)

バルティス ファーマ株式会社
東京都港区西麻布4-17-30 〒106-8618

NOVARTIS DIRECT

☎0120-003-293

受付時間: 月—金 9:00—18:00
www.novartis.co.jp

SANDOZ
Biopharmaceuticals

a Novartis company



Pioneering the future

遺伝子組換え天然型ヒト成長ホルモン製剤 処方せん医薬品^{*} 薬価基準収載

ソマトロピンBS皮下注5mg・10mg「サンド」

Somatropin BS S.C. Injection 5mg・10mg [SANDOZ]

ソマトロピン(遺伝子組換え)注射液

※注意—医師等の処方せんにより使用すること

■ 効能・効果、用法・用量、警告、禁忌(原則禁忌を含む)、使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

ソマトロピンBS皮下注5mg・10mg「サンド」専用

オムニトロフ[®] ペン5 / オムニトロフ[®] ペン10

Omnitrope[®] Pen

※上部ケースは、オムニトロフ[®]ペン専用保管ケース

操作方法又は使用方法、禁忌・禁止を含む使用上の注意等については、取扱説明書・添付文書をご参照ください。

オムニトロフ[®]ペン5 医療機器認証番号 220AFBZX00240000 オムニトロフ[®]ペン10 医療機器認証番号 220AFBZX00241000 管理医療機器 医薬品ペン型注入器

サンド株式会社

本社: 東京都港区西麻布4-16-13
製造販売元: 山形県上山市新金谷827-7

[資料請求先]

サンド株式会社 オムニ・コールセンター
フリーダイヤル: 0120-062-256
e-mail: inquiry.japan@sandoz.com URL: http://www.sandoz.jp

OMN1105-A-EJ
2011年5月作成

